

大規模増殖場造成事業関連調査

(風間浦地区)

(要約)

植村 康・足助 光久

風間浦地区における磯根漁業の生産額は地区総生産額の42%を占めていることから、コンブ、アワビ、ウニ等の磯根資源は地区漁業者にとって重要且依存度の高い魚種となっている。

本事業ではエゾアワビの増産を目的に昭和55～58年度にかけて増殖場を造成した。造成後の状況については完成年次が早かった易国間および下風呂工区を主体に追跡調査を実施し、餌料海藻の繁茂状況、放流アワビの生残、成長等を把握したのでその概要を述べる。なお、詳細は「第6回増養殖場造成事業報告会講演集」(水産庁振興部開発課、昭和59年10月)に記載済みである。

1 造成事業区の現況

本事業はアワビの増産を図るため、棲場造成および餌料海藻の着生をねらいとし石材、異型ブロックを敷設、配置したものである。造成海域は水深約4～12mの砂礫地帯を対象として、生物、物理条件、他種漁業との競合、管理の難易等を考慮し選定した。造成後の施設は、現在まで、浅い所で一部漂砂により石材、ブロックが埋没している以外は、石材の移動、ブロックの転倒等は無く問題は見られない。

2 造成漁場に於ける生物の状況

1) 餌料海藻の繁茂

易国間工区については前年度に引き続き良好なコンブの着生が見られており、餌料環境は満足出来る状態にあった。一方、下風呂工区については、造成後コンブの着生が見られたものの、エゾバブンウニの大量発生により食害を受け、コンブが無くなっていたが、管理対策としてウニの採取(移植)を実施したところ再びコンブの着生が見られ(1年コンブ29本/5.3kg/石材1㎡、59年7月調査時)、ウニの除去効果が確認された。

2) 放流アワビの生残と成長

易国間工区に放流されたアワビの生残と成長について調査したところ、昭和57年12月および58年5月放流群では37.7mm(19ヶ月)、そして58年12月および59年5月放流群では8.9mm(7ヶ月)の増殻長を示しており、当地先の天然貝の成長を上廻る成長が見られた。また、これら2群の生残率(再捕率)については前者で47.3%、後者25.3%であった。なお、放流後の期間の短い群で低い値となっている点については、サイズにより発見の容易さに差があること、調査時コンブの着生が多く発見率が更に低下していたこと等が影響しているものと考えられた。